ぴっぴだより　No7. 2017. 9. 29

夏休み最後の日曜日の8月20日に　十数年前に購入した紡ぎ機と織り機を車に積んで　山梨県北杜市にある工房に向かいました。メンテナンスも兼ねて　久しぶりに　紡ぎの学びをしたいと思い　急遽　申し込んだのです。

駐車場に到着したのが早過ぎて　しばらく車の中にいました。すると私の車の横に一台の車が停まりました。私と同年齢ぐらいのその「おじさん」の車には私と同じ紡ぎ機などが乗っています。この「おじさん」も紡ぎに関心があるんだなあと　しばらく見とれていました。

工房の従業員らしき方々が動き出し。染めた原毛や衣類やマフラーなどを網に広げてお日さまにあて始めました。朝陽に照らされたその色合いの美しいこと!!　その仕事が見たくて　車から降りました。ちょうど、合宿をしながら講習を受けている方々が　刈り取った原毛を洗う作業を始め出しました。「ゴミなんて自然に取れるから　大丈夫!!」と　皆さんに話しているのはあの「おじさん」。私も仲間に入れてもらって　洗う作業に見入りました。その「おじさん」からは穏やかな言葉が心地好く出てきます。

皆さんがのんびり楽しんでいる仕事を見て回ってから、私の紡ぎ機の所へもどると、私の紡ぎ機に油をさしたり、整えているのはあの「おじさん」。その作業を見ている私に、その方は「昔やっていたんだったら　昼までに勘を取りもどせるから大丈夫」と優しい笑顔で声をかけて下さいました。従業員や講習を受けていらっしゃる方々から「○○さん」と呼ばれていました。席をはずされた時に、その「おじさん」が工房の社長さんだとわかりました。

手仕事をしながら　その方の呟く言葉に聞き入りました。「親分ができたら職場はおしまい。親分がいないのがいい」「きれいに紡ごうとしているでしょ？原毛を傷めないように持って、糸の動きをだいじにしてあげる。ちゃんとなんて思わなくていい」「幼児が暮らしの中で、刈り取った毛糸をいじれる機会があるのはいいねえ」「モノゲンで油を取るのは、染めるためだけ。だいじなことは自然なこと。だから無理に取ろうと思わなくていい」「以前、羊を一匹乗用車に乗せてきた人がいたよ。途中、おしっこはどうやったんだろうねえ」

皆さんやり取りしながら、それぞれの手仕事を続けています。私の近くにいた若い男性は、川崎市の5000坪の土地で羊を一匹飼っている幼稚園に勤めている方でした。自分の作業をしながら、年長児なら、どこまで自分たちで作業できるだろうかと、一緒に考えていました。久しぶりの手仕事三昧の一日。自分の暮らしの中に、こういう時間も大切にしたいと改めて思った楽しい一日でした。

帰りの車の中で　絵本「アンナの赤いオーバー」（評論社、ハリエット・ディーフェント文、アニタ・ローベル絵、松川真弓訳）を思い出していました。

アンナの赤いオーバーは、すりきれて小さくなってしまった。お金はないし、お母さんはどうしたらいいか考えた。お百姓さんに羊の毛と金時計をとりかえてくれないかと頼んだ。アンナは、羊の冬毛を刈る春まで何度も羊に会いに行った。「ねえ、毛のびた？」「メエエエ！」お母さんが「アンナ、オーバーはどんな色がいい？」「赤いの！」「それじゃあ　コケモモをつみましょう。きれいな赤に染まるわよ」そして、クリスマスの日、アンナは羊に会いに行った。「毛糸ありがとう！あたしの新しいオーバー　気に入った？」

ほしいものは自分で作り出す。作るには時間がかかる。待って待って待って手に入った時の喜びは何倍にもふくらんでいることでしょう。

何年か前のぴっぴの森でのケーキ屋さんごっこに　眞弓「プリンください」と加わりました。お店屋さんは「プリンですね。しばらくお待ちください。乳しぼりをしてきますから」プリンができるまで　どんなに美味しいプリンなのだろうと、想像しながら、わくわくと待ちました。遊びのごっこなのだけれど、こんな暮らし方いいなあと　ごっこを作り出している子どもたちに惚れぼれしていました。

「ゆっくりがいっぱい」の生活を楽しみたい。大切にしたいと思います。そして「作り出す」という生活は、考える力、自分で決断して活動する力、感じる力を必要とすると思います。生活の中で作り出すことが減ってくると、考える、活動する、感じるも減ってくるように思います。

この秋、「自分が作り出すもの」をじっくり見つけてみませんか。その「作り出すもの」に仲間がいれば　さらに楽しいかもしれませんね。秋のぴっぴの森で、ぴっぴの子どもたちのゆっくり、じっくり、たっぷりから、どんなことが始まるのか。一緒に楽しみたいと思います。

：眞弓

〈おおきいくみだより〉

おおきいくみの日。リンリンリーンと鈴がなると子どもたちはマラソン前の準備体操をするため周回道路の駐車場に集まります。

それまでお母さんと離れがたく握った手を離せない人もこの音を聞くとパッと切り替わり走りだします。涙が止まらない人も長く続くことはありません。ぴっぴに向かうスイッチが入ったら大丈夫。

9月中旬。この日は、学年ごとで劇遊びをしようと考えていました。まつぼっくりは、笛を使った準備体操をすると大盛りあがり。そのままの雰囲気のままマラソンと朝の集まりへ。今月からまつぼっくりに仲間入りした夏樹くんも楽しげな同じ学年の仲間たちに表情が和らいでいます。

まつぼっくりの劇遊びの題材は「おおきなかぶ」です。
海賊船前の大木に長いロープを巻きつけてひっぱれるようにしました。
そして「おおきなかぶ」の絵本を出すと「その本、知ってる！」「ロープひっぱるの？」「やる！やる！」「やりたい！」とそれぞれが劇遊びに気持ちを向け始めました。
一度、絵本をゆっくり読みました。それから「おじいさんもおばあさんもひとりぼっちでなくていいよ。」「好きな役をやってね。」と伝えました。そして劇遊びスタート！

―おじいさんがかぶをうえました。―と始まると英志くんが「英志！おじいさんやる！」とロープをひっぱりにいきました。―ところがかぶはぬけません。―
―おじいさんはおばあさんをよんできました。―次は渚ちゃんがいきました。すると突然、澄怜ちゃんが「すみれ、おばあさんひとりでやりたかった…」とつっぷして泣きだしました。澄怜ちゃんとみんなに向けて「ひとりじゃなくていいんだよ…」と声はかけそのまま進行しました。そして―おばあさんはまごをよんできました。―と続けると「はーい！」と澄怜ちゃんと沙季ちゃんが出てきました。ケロッとしている澄怜ちゃんに驚きました。自分で自分の気持ちに折り合いをつけたのですね。それから猫が真永ちゃん、ネズミは玄太くんと続き―うんとこしょ どっこいしょ やっとかぶはぬけました―

長いロープを用意したのは、登場人物が綱引きのようにひっぱることをこちらが勝手に想像していたからです。ところがおばあさん役の渚ちゃんが絵本にあるようにおじいさん役の英志くんの体をひっぱると それに続く人たちも前の人をひっぱり「演技」していたのです。ナレーションの大人は朝の集まりの場所からストーリーを進行しただけです。細かいことは子どもたちに任せ自分のやりたい所で前に出て演じていきました。さくらちゃんは「さーちゃん、まご、やろうかな…」と次の回を待っています。夏樹くんは微笑みながら見ています。特別な声かけはしません。この見ている時も感じている時も考えている時もいつもこの「時」を大切にしていきたいと考えています。自分から一歩踏みだす時を待っています。

2回目は、真永ちゃんがおじいさん。すると真永おじいさんは地面にかぶを植える動きの演技を始めました。そして孫役のさくらちゃんも「はーい！」とかわいい孫になりきり登場していました。続く登場人物も「わんわん」とか「ニャー」とか「チューチュー」とひとつの役になりきることを楽しんでいました。かぶをひっぱる時(前の人をひっぱっているのに)転ばないのも「演技」しているからでしょうか。
それはそれは抜群の演技力を見せていました。

劇遊びのあと、くりもおおくりもまだ続いていたのでまつぼっくりは散歩に出掛けることにしました。散歩の準備(リュック持ってくるから)待っててね」と伝えまつぼっくり8人は残って待っていました。準備を整えて8人の元へ戻ってみるとかぶに見立てた大木に8人が群がっています。沙季ちゃんが「あーおいしかった！」真永ちゃんが「かぶは茹でて食べるんだよ。」玄太くんが「おおきなかぶだったからね。(みんなで食べられた)」と説明してくれました。そこでは8人が「おおきなかぶ」の試食会をしていたようなのです。みんなで空想をふくらませて楽しんでいることに嬉しくなりました。

さらにお散歩では…栗を拾ったり、虫を見つけながらのんびり歩いていると急に誰かが「舞踏会へいくわよ！」「さあ舞踏会が始まっちゃうわ！」とごっこ遊びが始まり、英志くんも玄太くんも「ぶどうかい?!ぶどうかいだ！」と走りだし、ワイワイ、キャーキャーとにぎやかなお散歩になったのでした。

パーティーごっこにお姫様ごっこ、おばけ退治に探険隊…。
空想の世界をひろげみんなでひとつのことをじっくり楽しむまつぼっくりの子どもたち。
「あぁ遊んだぁー」と満足な一日一日を積み重ねていきたいなと思っています。

(美穂)

田んぼだより

稲刈り お疲れさまでした。お天気と相談しながらのことで、日程が前倒しになったり、当日も時間を遅らせたり、色々と直前の変更にご協力いただき感謝です。
思えば 種もみを水に浸けたのが今年の春4月1日、おおきいくみで種もみ蒔きをしたのが4月17日、みんなで田植えをしたのが5月24日でした。それから毎日水の具合いを見て草とり、草刈りし続けること約4ヶ月。やっとやっとの稲刈り。さらにこれから天日干しをして脱穀してやっと食べられるのはまだ先。いやはやお米を作って食べるには時間がかかります。

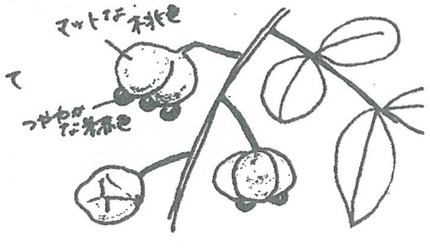
評論家で詩人の吉本隆明さんは、その時代の「時間感覚」というものが、どういうふうにできているのかということについて「その時代の時間感覚というのは、モノを作ってから消費されるまでの循環の速度で決まっていく*」と言っています。農業の時代だと米を作って食べるまでの時間が、その時代の「時間感覚」をつくっていたと。工業製品の製造だったらもっと速い。それまでの農業をしている人の時間感覚では、工業社会はとてもせわしなく感じるということです。現代の農業で作物を作るというのはむしろ工業製品を作ることに近いですね。こういう時代だからこそ、機械でなく身体や手足を使って、その可能な範囲でできるモノを大切に食べたり使ったりしていきたいと思います。

きれいにはぜかけが終わった田んぼに立って、ここで自然感じられることを大切にしていきたいと、そんなことを思いました。

：美和子

＊「毎日新聞イトイ新聞「吉本隆明 125講演」」より

ぴっぴの森の木の実たち　9月 マユミ

夏の間ちょっぴりとしていた森が少しづつ赤や黄色にそまり、ひんやりとした空気の中にもほっこりとした色あいの多い季節になりました。この時期は葉もそろですが、木の実や草の実が赤・青・紫・白・黒・オレンジ等々色とりどりに熟し森の散歩が楽しくなります。
木の実、草の実が色づくのは、鳥たちの目について、食べてもらい種子散布をしてもらうのが目的なのですが、一番、鳥にみつけてもらいやすい色は何色だと思いますか？木の実のそそちょっと思いだしてもらうと、森の中で最も多い色は赤系の実なのです。ぴっぴの入り口、スタッフ駐車場のところには、この時期かわいらしい桃色の実がなる木があります。真弓"マユミ"という木で、枝がよくしなるので昔ゆみの材料として使われたのでその名がついたとか。
でも、私は、何年か前にぴっぴの子どもたちがマユミの実をみて「ももの二ちゃん♪」と呼んでいたのがまさにぴったりだなあ～と思って、みるたびに「ももの二ちゃん」だと嬉しくなってしまうのです。
そしてももの二ちゃんは、実がパックリと4つに割れ、桃太郎ならぬつぶらな真っ赤な実が中から4つぶらんとぶらさがってできます。
ピンク色と赤（桃がかった赤）の2色で鳥をひきよせているのですね！
送迎の際に子どもたちと一緒にももの二ちゃんもとい、マユミの実をぜひ、探してみて下さいね！

：菜々恵